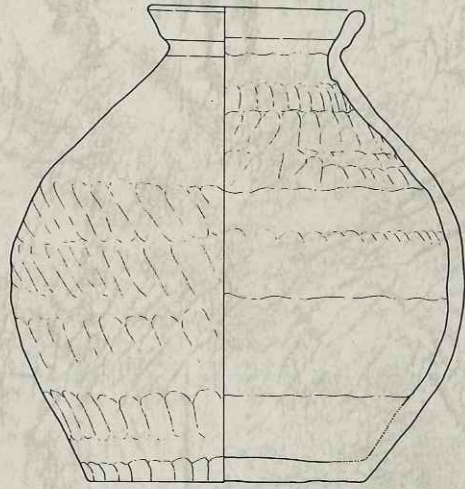


特別史跡

# 一乗谷朝倉氏遺跡35

平成15年度発掘調査・環境整備事業概報



福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館



第114次発掘調査区(上方)と第112次発掘調査区(下方)



第114次発掘調査井戸5225出土木製面

特別史跡

# 一乗谷朝倉氏遺跡35

平成15年度発掘調査・環境整備事業概報

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

# 序 文

このたび、平成15年度の発掘調査並びに環境整備事業の概報をまとめました。

計画発掘調査は第114次調査で、通称「八地千軒」と称せられる八地谷の入口部南側に位置する箇所、大規模な武家屋敷跡などを検出しました。遺物では井戸内から初めて能面の出土をみたことが特筆されます。越前は鎌倉時代から江戸時代初期にかけて優れた能面師が数多く輩出したことで全国的に著名でしたが、これまで一点の出土もなかったからです。それは良質の檜材で造られた「獅子口」の面で、猿楽の「石橋」で使用されるものです。「石橋」は、足利義昭が一乗谷在住の折、義景館で当主が歓待した際に演じられた演目の一つです。古文書や古文献から越前では越前猿楽が盛況であったことはこれまでにうかがい知ることができましたが、その遺物（能面）の発見は初めてで大きく報道され、県民に明るい話題を提供しました。

環境整備事業は二箇所で行われました。遊歩道沿いの第104次発掘調査地（2,350m<sup>2</sup>）と県道沿いの第100次発掘調査地（1,300m<sup>2</sup>）でした。この他、湯殿跡庭園の鶴石組の中心石と義景館の枯山水の亀石を補修しました。観光客の目にふれる場所の整備が中心でした。

最後になりましたが、上記の諸事業について、ご指導、ご助言を賜りました朝倉氏遺跡研究協議会の諸先生方をはじめ、文化庁、福井県、福井市の関係各位、発掘調査や遺物整理に当られた皆様に対して厚くお礼を申し上げます。

平成16年3月

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

館長 青木 豊 昭

# 例言

1. 本書は、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館が平成15年度に実施した国庫補助事業による発掘調査、および環境整備事業の概要報告書である。
2. 本年度は、発掘調査・整備事業「中期10ヶ年計画」の6年目にあたる。本書には、計画調査である第114次発掘調査、現状変更に伴う第117次発掘調査の成果、および第100・104次発掘調査地の環境整備概要を収録した。
3. 本書の作成にあたっては、調査担当者が各項目を執筆し、項目末に文責を記した。また、全体の編集は水村伸行が担当した。

# 目次

巻首図版

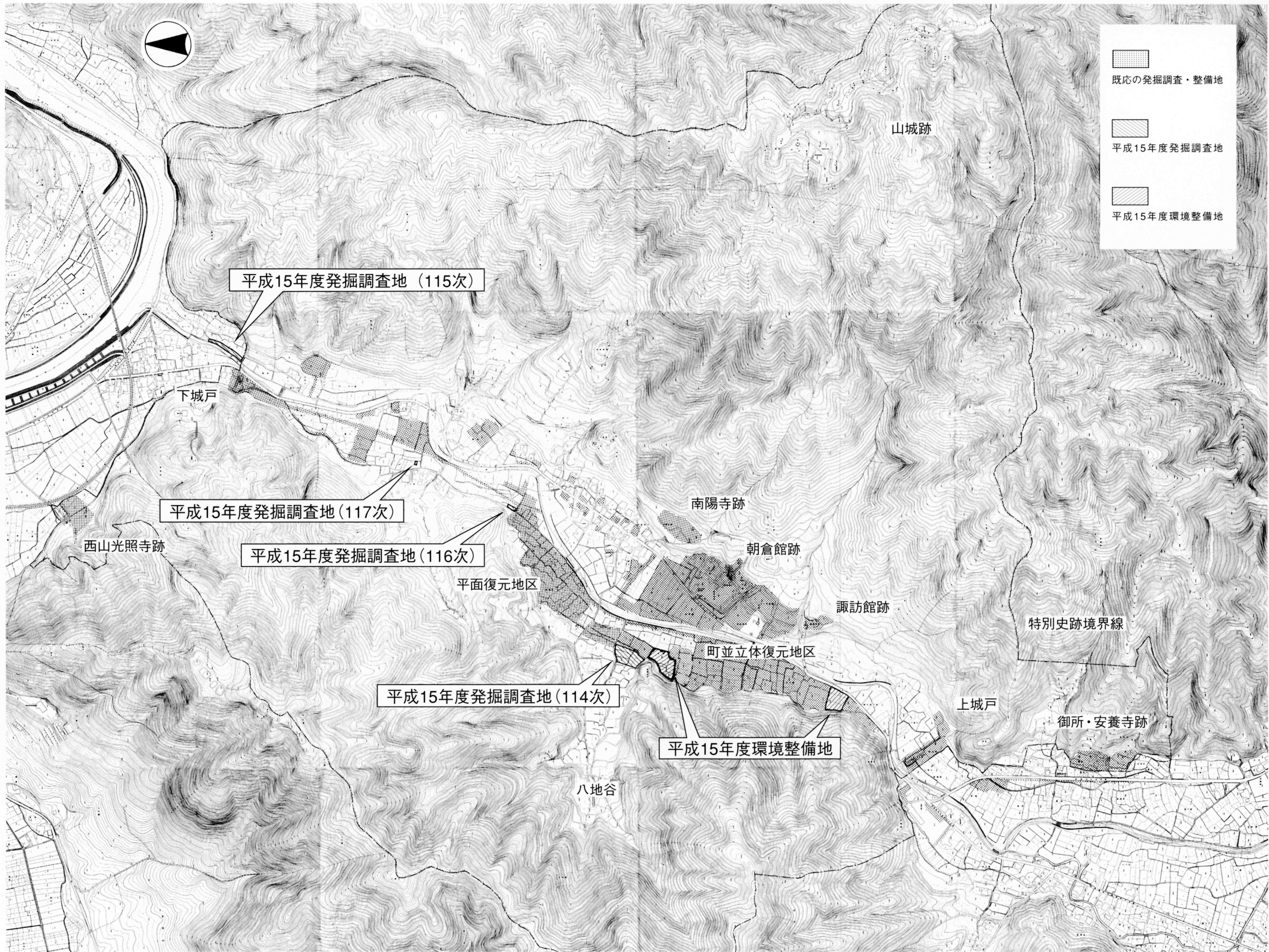
序文

例言

目次

1. 平成15年度の事業概要	3
2. 第114次発掘調査	7
遺構	7
遺物	15
3. 第117次発掘調査	20
遺構	20
遺物	21
4. 環境整備	22

第1図 平成15年度発掘調査・環境整備位置図	第8図 第114次発掘調査出土遺物実測図(1)
第2図 第114次発掘調査位置図	第9図 第114次発掘調査出土遺物実測図(2)
第3図 第114次発掘調査遺構全測図	第10図 第117次発掘調査遺構平面・断面図
第4図 第114次発掘調査主要遺構模式図	第11図 第117次発掘調査出土遺物実測図
第5図 第114次発掘調査SB5166遺構図	第12図 第104次調査地斉藤整備図
第6図 第114次発掘調査SB5164・5165・5191遺構図	第13図 遺構・レミファルト舗装関係図
第7図 第114次発掘調査SI5197立面図	第14図 第100次調査地川合殿整備図
図版 第114次発掘調査区遺構	PL.1～10
同 出土遺物	PL.11
第117次発掘調査区遺構	PL.12
同 出土遺物	PL.12
第104次調査地整備	PL.13～14
第100次調査地整備	PL.15



第1図 平成15年度発掘調査・環境整備位置図

0 500m

# 1. 平成15年度の事業概要

平成15年度は下記表1のように合計7か所で発掘調査と環境整備事業を実施した。まず発掘調査は、計画調査として昨年度に引き続き八地谷地区の発掘調査を継続した。八地谷は一乗谷の城戸の内のほぼ中央に位置し、一乗谷川の支流の八地谷川が西から東へ流れ、その両岸に形成された東西400m、南北160mほどの小さな谷である。今年度の第114次調査区は八地谷川の南側にあり、昨年度調査の第113次調査区の南西隣で、かつ平成13年度調査の第112次調査区の西隣にあたる。この調査区は月見櫓跡の北側直下に位置し、朝倉館の唐門から北西約200mに位置する。調査前の標高は51.8～52.8mで朝倉館より1～2m高い。調査の結果については、次章で述べる。

次に環境整備事業は、この第114次調査区のすぐ南に位置する平成11年度発掘の第104次調査区、ならびにそこから町並立体復元地区を挟んでさらに南側に所在する平成9年度発掘の第100次調査区についてなされた。こうした整備により町並立体復元周辺の南北500mにわたる地区の整備が着実に進められた。

また、これらの国庫補助事業とは別に、平成15年度は、河川改修や中山間事業、現状変更などに伴う発掘調査を3件実施した。まず第115次調査として、一乗谷の北端部、一乗谷川の最下流部東岸の地で、河川改修に伴う調査を実施し、下城戸外部に位置する良好な遺構を検出した。つぎに中山間事業の遊歩道整備に伴う道路敷部分の調査を、赤淵地区の北端部で第116次調査として行ない、既調査の道路遺構に連続する道路・溝・土塁等を検出した。その他遺跡内の現状変更に伴う小面積の調査を実施した。

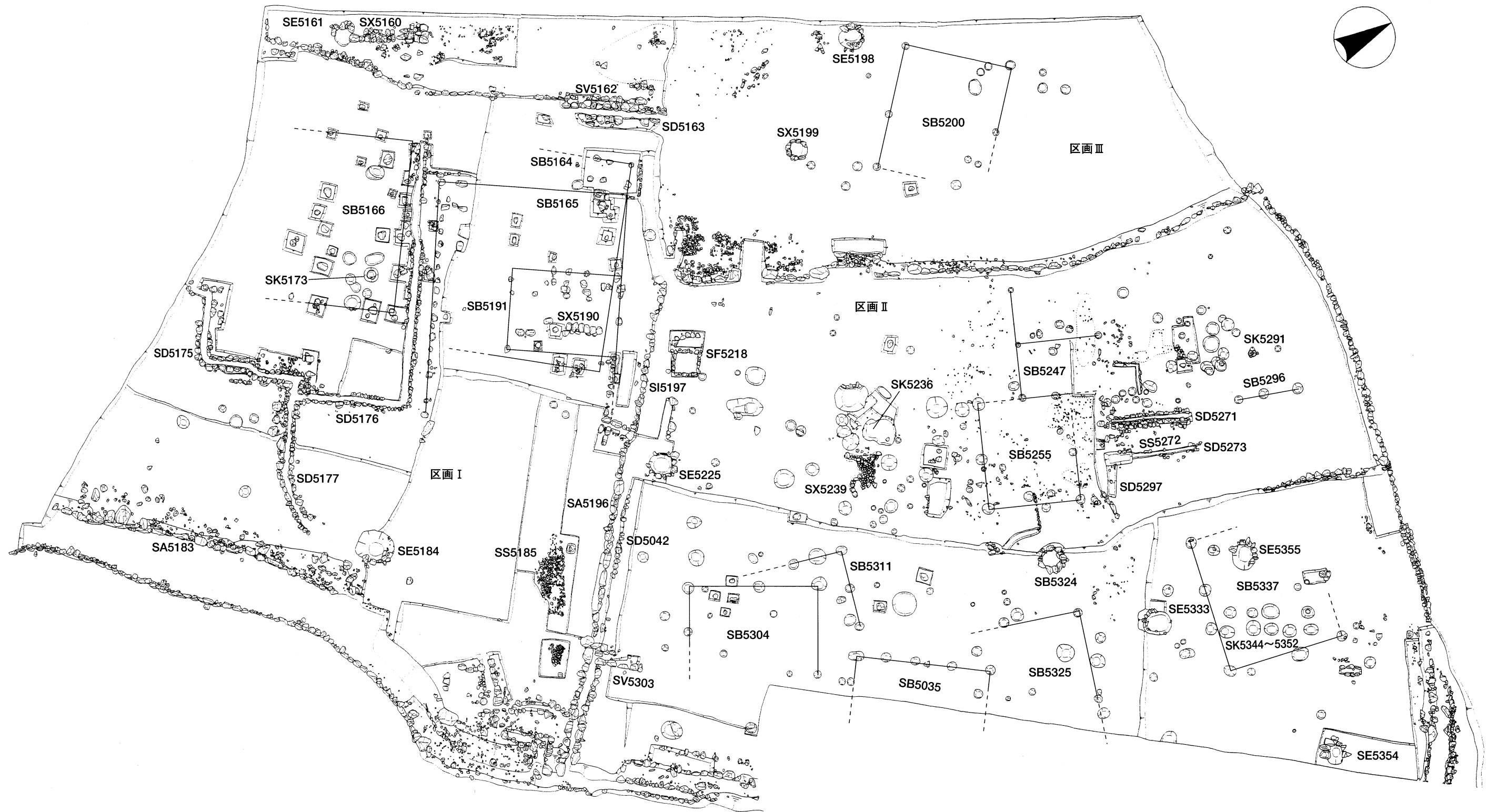
(佐藤 圭)

調査次数	調査箇所	調査期間	面積	調査事由
第114次	福井市城戸ノ内町 字雲正寺	平成15年 7月1日～12月25日	1,700m <sup>2</sup>	中期10か年計画に基づく調査
第115次	福井市安波賀町 字向山	平成15年 4月1日～10月14日	540m <sup>2</sup>	一乗谷川河川改修事業に伴う調査
第116次	福井市城戸ノ内町 字川久保	平成15年 8月20日～10月17日	318m <sup>2</sup>	中山間総合整備事業に伴う調査
第117次	福井市城戸ノ内町 字中惣	平成15年 7月1日～7月11日	26m <sup>2</sup>	農作業小屋建設に伴う現状変更許可申請による調査
環境整備箇所		整備期間	面積	整備事由・内容
第104次発掘調査地 福井市城戸ノ内町字齊藤		平成15年 8月21日～10月24日	2,350m <sup>2</sup>	中期10か年計画に基づく整備、建物跡・石敷遺構・溝・石積施設、土塁境界石の整地・舗装・補修・植栽・遺構表示石の設置
第100次発掘調査地 福井市城戸ノ内町字川合殿		平成15年 9月10日～10月27日	1,300m <sup>2</sup>	同上、整地・土塁跡の盛土、植栽
湯殿跡庭園・朝倉義景館		平成15年10月27日		庭石補修工

表1 平成15年度事業概要一覧







第3図 第114次発掘調査遺構全測図



## 2. 第114次発掘調査

平成15年度の発掘調査区は、平成13年度におこなった第112次発掘調査区の西側に隣接している。一乗谷朝倉氏遺跡の主要部は、南北約2.0kmの細長い谷沿いに展開するが、その谷の中央部付近に八地谷と呼ばれる東西方向に約0.4km延びる谷が、主谷に対してほぼ直交する地形で延びており、本調査地点は主谷から八地谷へ入る入口に位置する。また、朝倉義景館からは一乗谷川を挟んで真正面に位置する。

### 遺構 (第3～7図、PL1～10)

#### 区画 I

本区画は、調査区の最も南に位置しており、区画の東側は平成13年度におこなった第112次調査区である。また、南側は頂部に月見櫓の所在する西から東へ張り出した尾根によって区切られている。本区画は図4を見ても理解されるように、東西に細長い区画割りを持っており、区画内西側半分は広場的な空間であり、東側半分に建物を配置する空間構成を呈している。

**SA5183** 本区画の東端を画する石垣であり、延長14.5mを検出した。高さは1.5mを測り、主に長軸1.0m前後を測る大形の石材を用いて構築されている。北側を後世の改変により欠失しているため、全体の様相については不明である。

**SA5196** 本区画と区画Ⅱを画する石垣であり、北側にはSD5042が平行している。東端は112次調査時に確認されているSD5141との接続点であるが、西端については後世の改変のため不明であるものの、おそらくSD5163との接続地点であると想定される。そのばあいの延長は30.6mを測る。本石垣は当初SI5197を挟んで二分されていた別々の石垣であったが、SI5197廃棄後に門を閉塞した際に1本の石垣に変更されたものである。

**SD5163** 区画ⅠとⅢを画するSV5162の東側溝である。依存状態は悪く、ごく一部を確認したにすぎないが、北端でSD5042と接続するものと考えられる。

**SD5042** 区画Ⅰと区画ⅡおよびⅢとを画する溝であり、後世の攪乱により検出されなかったものの、西端ではSD5163と接続するものと想定される。本溝の東端は、平成13年度におこなわれた第112次発掘調査により検出されている。側石のうち区画Ⅰ側の遺構レベルが高いことから、南側石積の依存状態は良好であった。

**SB5166** 区画内南側に建つ礎石建物であり、東西8.6mを測るが、南北は南側の礎石列を検出することができなかつたため不明である。上層の遺構である。

**SK5173** SB5166内北東コーナー付近において検出された埋甕であり、越前焼の甕底部が据えられた状態で検出された。床下に据え置かれ、口縁部が床上へ出る構造を持っていたものと想定される。

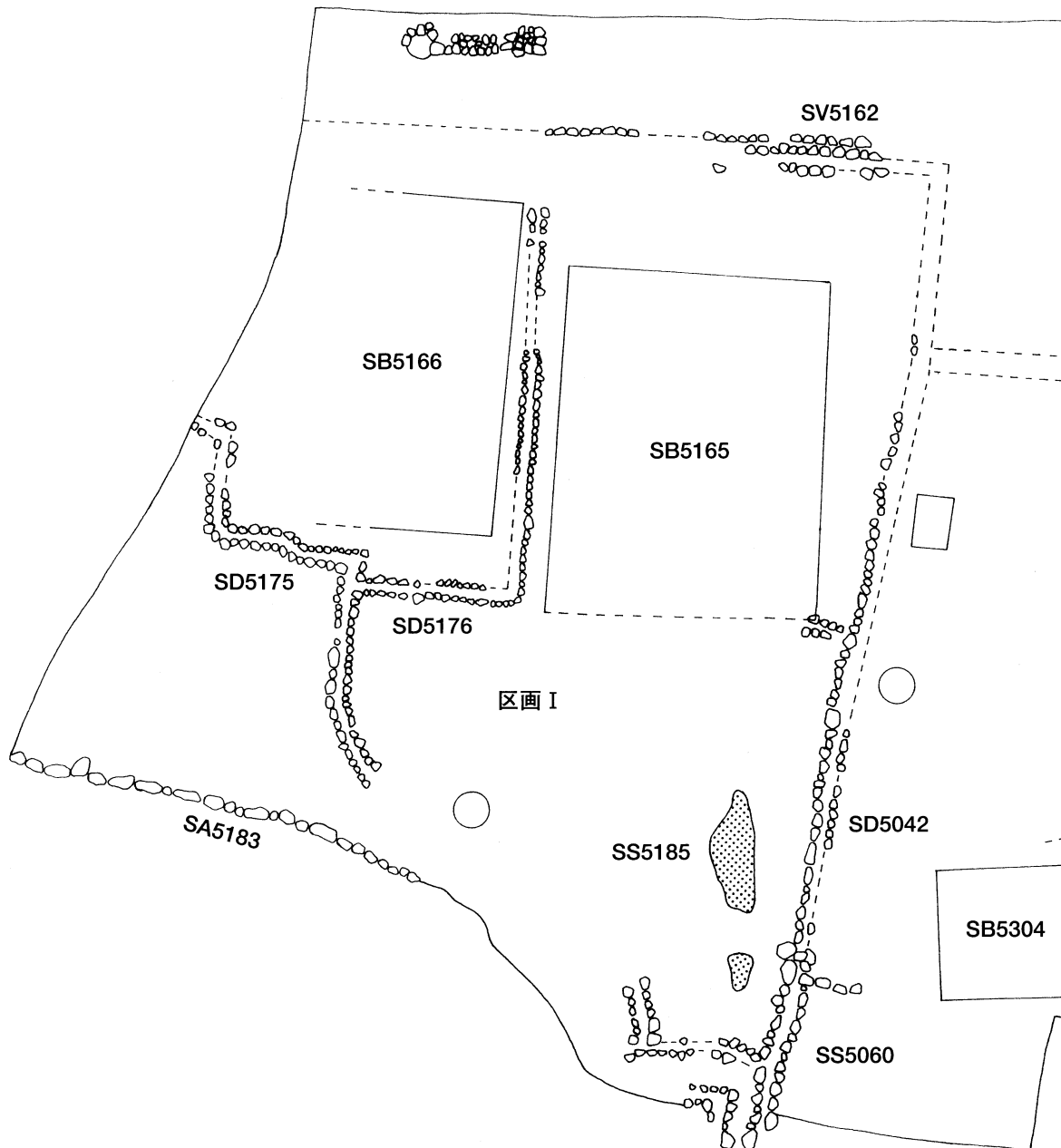
**SB5164** 本区画内で最も上層に位置づけられる礎石建物であり、多くの礎石が後世の改

変により除去されてしまっているため、全体的な規模の把握には至らなかった。

**SB5165** SB5164の下層に位置する礎石建物であり比較的良好な状態で検出することができた。特に、南側礎石列が良好な状態で遺存しており、その礎石の設置間が2尺であることが理解される。また、SD5176は本建物の雨落溝である。

**SB5191** SB5165の遺構面整地土内より検出された礎石建物であることから、SB5165に先行する建物であることは明らかである。主軸方向はSB5165と同一である。

**SX5190** 平面プランでは、一見したところ側石に蓋石を載せた暗渠のように見ることができるが、東側において確認される石列が西側においては確認されないことから、暗渠



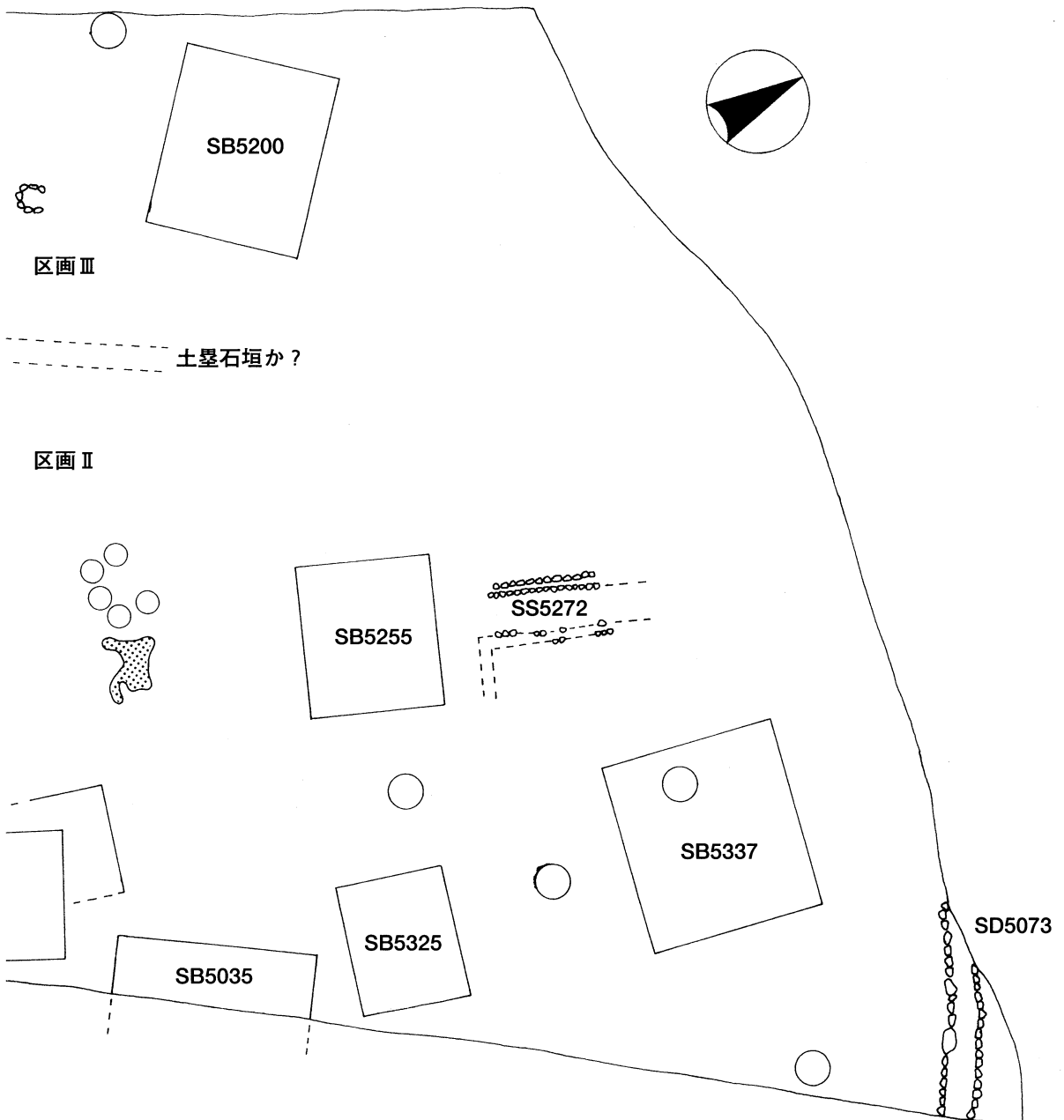
第4図 第114次発掘調査主要遺構模式図

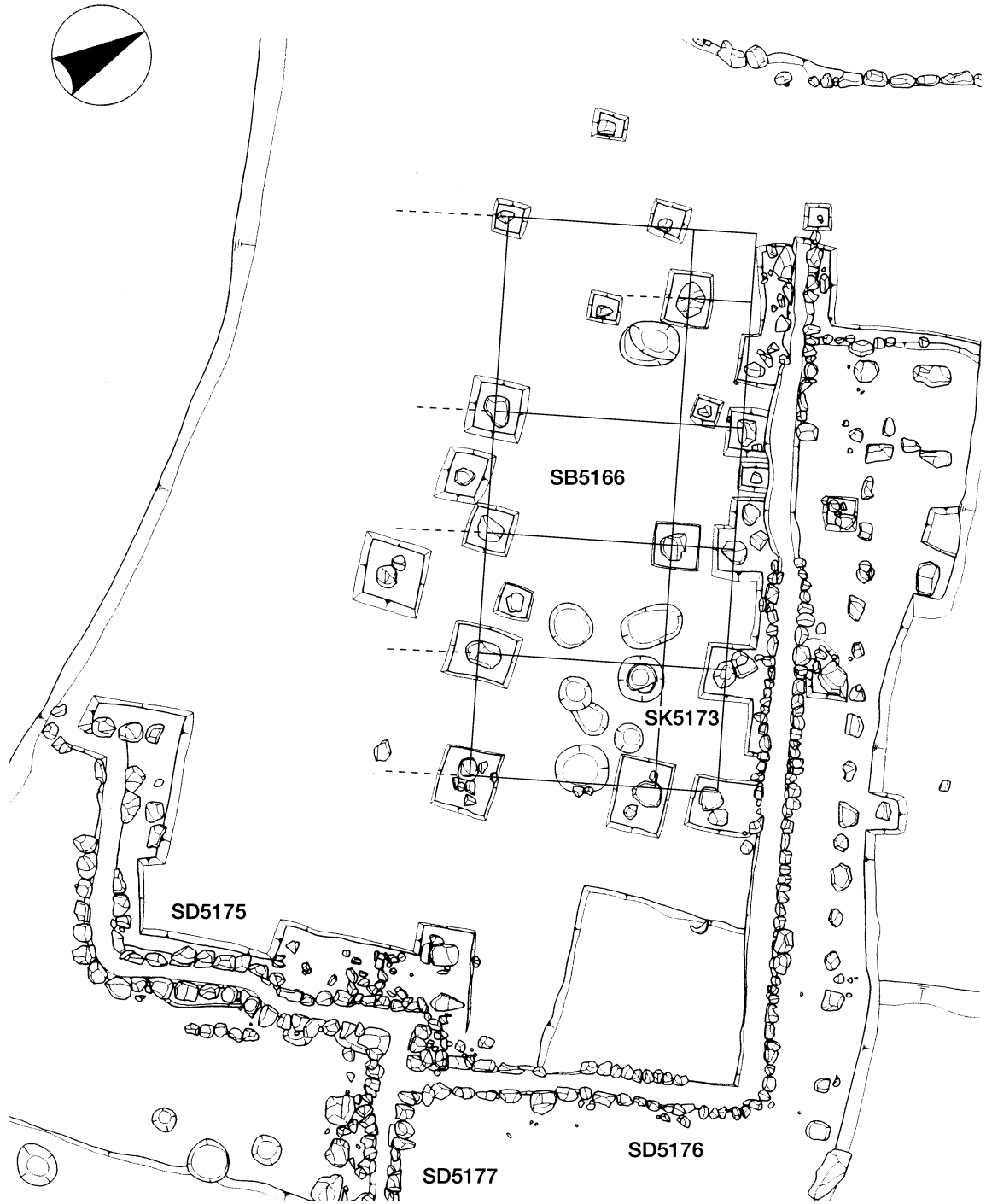
でないことは明白である。SB5165とは同一レベルであり、これに付属する遺構であるものと考えられる。

SD5175 南側山裾から流れ出る溝であり、流路はL字形を呈する。幅0.2m前後を測り、北端においてSD5177と接続する。

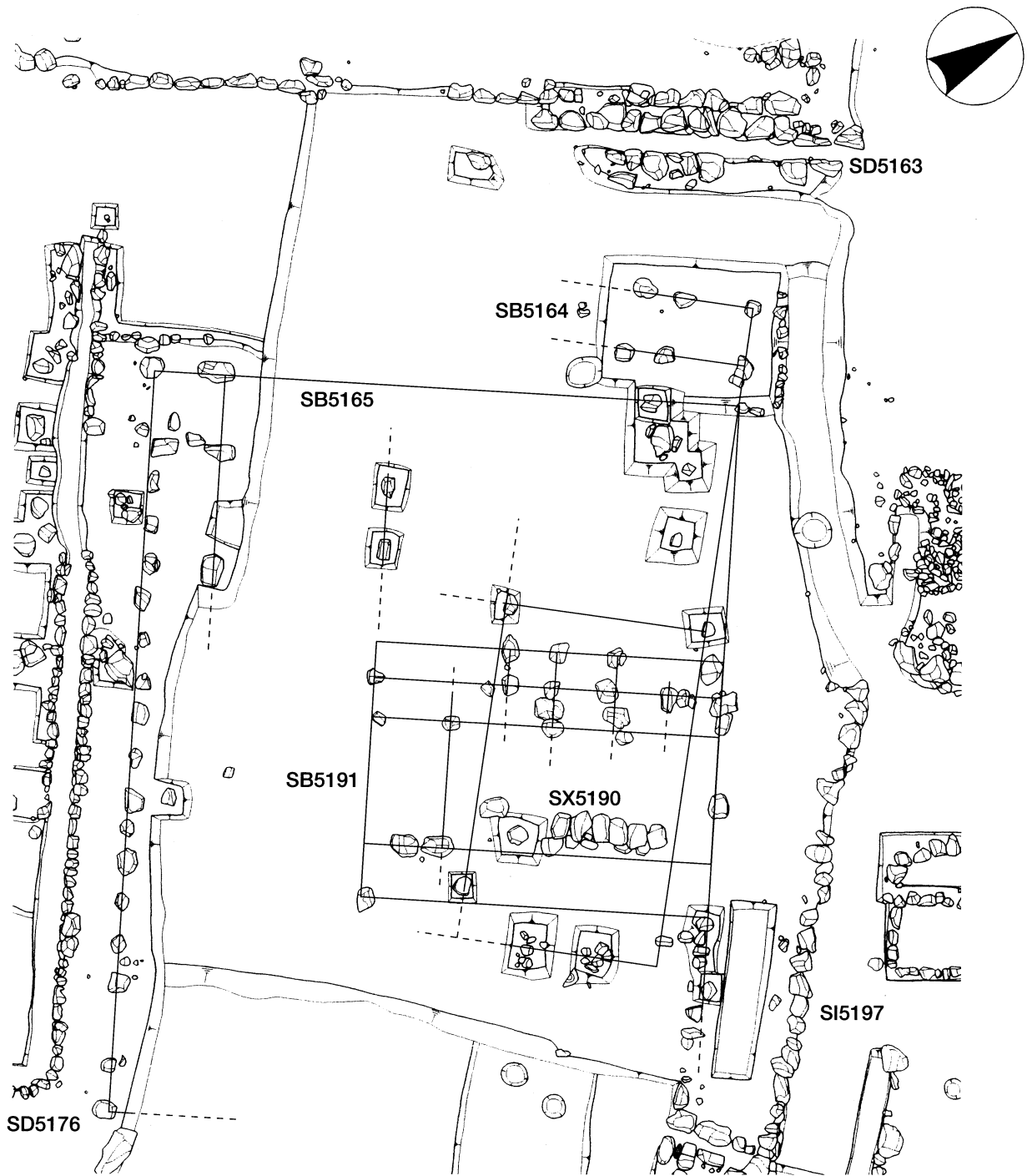
SD5176 SB5166の雨落溝であり、この建物に平行して東西方向に流れたのち、南方向へ直角に屈曲する。南端ではSD5177へ接続する。幅0.2~0.3mを測る。

SD5177 SD5175、5176から流れ出る排水をまとめる溝であり、緩やかな曲線を描きながら西から東へ延びるが、途中から欠失しているため、全体的な線形を知ることはできな





第5図 第114次発掘調査SB5166遺構図



第 6 図 第114次発掘調査SB5164・5165・5191遺構図

い。幅0.2～0.3mを測り、深度は接続するSD5175、5176よりも深く0.3mを測る。

SE5184 本区画内で確認された唯一の井戸であり、礎石建物の前面広場に位置する。遺存状態は不良であり、大部分の石材が崩落していたため、深度2.0mで掘削を中止した。掘込面での直径が1.8m前後であることから、直径1.0m前後を測る井戸であったと推定される。

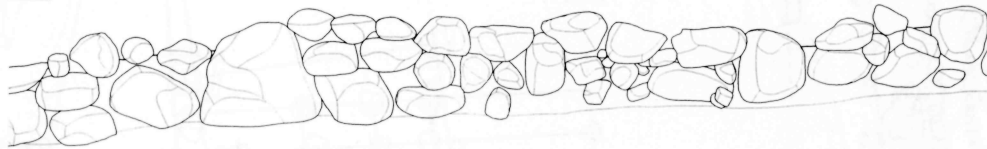


写真1 SE5184

SS5185 全面砂利敷通路の一部分である。残存延長13.4m、残存幅は最大で3.0mを測り、路面は硬化していた。北側側面は、良好に遺存しており、直線的な側面を確認することができた。本通路は、区画Ⅰへの通路であったものと考えられるが、区画内改変に伴う整地時に廃棄され、整地土により埋められていることが調査所見により確認されている。

SI5197 古い段階で機能していた門であるが、本区画の改修がおこなわれた段階で、廃棄閉塞されSA5196の土塁石垣に組み込まれている。幅は2.2mを測る。門内にトレンチを設定し、施設の確認をおこなったが確認はされなかった。

52.5m



第7図 第114次発掘調査SI5197立面図 (S=1/40)

## 区画Ⅱ

### 掘建柱建物群

区画Ⅰの北側に連続する区画であり、今回の発掘調査で最も広い面積を持つ区画である。第112次発掘調査では、本区画の東辺部を一部調査している。本区画の特徴として、掘建柱建物を多く確認していることがあげられる。本区画のように特定の範囲に掘建柱建物が密集して検出された地区は、本遺跡内において他に類例は知られていない。

SB5035 平成13年度におこなわれた、第112次発掘調査において一部が確認されていた東西二間、南北四間の掘建柱建物である。

SB5247 掘建柱建物である。東西二間は確定できるものの、南北は不明である。

SB5255 東西二間、南北一間の掘建柱建物であり、位置的に一部がSB5247と重複する。前後関係は確認し得なかった。

SB5296 道路SS5272に面する掘建柱建物であるが、規模等は不明である。ピット内に笊谷石製の鉢と越前焼播鉢を入子状に設置していたSK5291は、本建物内の施設であるものと想定される。

SB5304 東西二間、南北二間に復元される掘建柱建物である。

SB5311 SB5304の北西コーナー付近で検出された掘建柱建物であり、一部を検出したのみであるため、規模等は不明である。

SB5325 SB5035の北方で確認した掘建柱建物であるが、一部を検出したのみであるため、規模等は不明である。

SB5337 本区画でも一段低い調査区で検出された掘建柱建物である。南側の柱穴列は良好な状態で遺存しており、柱間三間である。建物内に、井戸SE5355を有している。

SD5271 道路であるSS5272の西側側溝である。幅0.2m前後を測るが、延長は3.9mを確認したにすぎない。

SD5273 SS5272を挟んで、SD5271と対になる側溝である。幅0.2m、延長は3.8mを確認したが、遺存状態は悪く部分的に側石が残るのみであった。南端では、SD5297と直角に交わることが確認された。

SD5297 遺存状態は悪く、側石は残存せず掘り方のみを確認した溝である。西端では、SD5273と接続している。

SE5324 上層の井戸と考えられる。直径は0.8mを測り、深さは2.6mを測る。

SE5225 直径1.0mを測る井戸であり、下層確認面において天場石を確認したことから、下層に属する井戸であると考えられる。深さは4.5mまで掘削したものの、安全上のため調査を打ち切った。埋土上層から中層にかけて遺物はほとんど認められず、遺物の包含層は中層以下であった。

#### 面出土の井戸

SE5333 本区画内において、レベル的に約0.6m低く下がる位置との境界上に位置する井戸である。本来は高い位置から掘り込まれていたものの、後世の開墾により半分が削り取られた状態で検出された。直径1.0m前後を測るが、積石の遺存状態が不良であったため、安全上から掘下げを途中で打ち切ったため、実際の深度は不明である。

SE5354 調査区内北東隅において検出した直径0.6m前後を測る井戸である。一部は崩落していたものの、天場石から残る井戸であり、深さは1.6mを測る。

SE5355 直径0.9m前後を測る井戸であり、SB5337に伴う建物内の井戸であるものと考えられる。東側半分は崩落していたものの、西側半分では天場石から残存しており、深さは1.6mを測る。

SF5218 方形石積遺構である。当初は、長軸1.8m、短軸1.0mを測る長方形プランであったのに対し、途中で西側の側壁を積み直し、1.0m四方の正方形プランに改変している。

SK5236 長軸1.1m、短軸は北側をSK5237により切られているものの、約0.8mを測る楕円形を呈した土壙である。本土壙内には、第9図12に示す越前焼壺が正位置で埋設されていた。本遺構は、SX5239とともに数少ない上層遺構である。

SK5291 プランの不明確な掘建柱建物であるSB5296に付属する施設と考えられる。直径0.4mのピット内に第9図4に示す笏谷石製の鉢を据付、その中に第9図5に示す越前焼播鉢を設置して



写真2



写真3



写真4

SK5291検出状況



いた。

**SK5344～5352** 直径0.6～0.9m前後を測る土壙であり、2列に直線的に並んで検出された。本遺跡で通有に認められる甕埋設に伴う土壙と考えられるが、甕は廃棄時に抜き取られており、土壙は埋め戻されていた。SB5337とは主軸が異なり、検出時の所見からも時期差があるものと考えられる。

**下層道路 SS5272** SD5271とSD5273に挟まれた砂利敷道路であり、幅1.2m、延長は4.0mのみを確認した。道路南端では掘立柱建物であるSB5255が確認されているため、本道路は区画2で検出されている掘立柱建物群への進入路と考えられる。

**SV5303** 平成13年度におこなわれた、第112次発掘調査時に検出された東西道路SS5059の西端において検出された土壙石垣である。検出された石列は5石のみであったが、石垣北側で検出されている掘立柱建物群との関係から、当初よりSS5059からの目隠し的な小規模土壙石垣であったものと考えられ、本土壙によりSS5059は行き止りとなる。また、石垣に沿う形でSS5060が第112次発掘調査により検出されており、SS5059とSS5060はT字路となることが確定した。

**SX5239** 拳大の石を敷き詰めた石敷である。検出したプランは不整形を呈しているが、これは後世の攪乱を受けなかった部分が検出されたのみであるためである。本遺構は数少ない上層遺構の一つである。

### 区画Ⅲ

区画Ⅰ・Ⅱの西側に位置し、南北方向に細長い区画であるが、区画の大部分が西側の調査区域外に伸びている。レベル的には、区画2よりも0.7m高いことから、石垣等により区画

する施設が区画Ⅱとの境界付近に存在していたものと想定されたため、トレンチを設定し確認したものの、石垣等の施設を検出するには至らなかった。しかし、区画境界付近には、裏込に用いるものと同様の石材が多数散在していたことから、本来は土壙石垣状のものが存在していたものの、後世の改変により削平されてしまった可能性も十分に想定される。

**SB5200** 東西二間×南北一間の掘立柱建物である。

**SE5161** SX5160の南端に位置する井戸であり、直径0.8mを測る。深さが0.5mと極めて浅いことから、井戸以外の機能を有していた可能性も考えられる。



写真5 SS5059 - SV5303

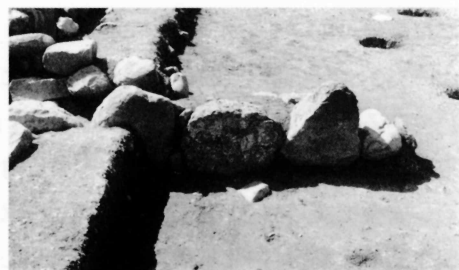


写真6 SV5303



写真7 SX5239

SE5198 調査区西端において検出した井戸であり、直径0.6m前後を測る。後世の削平により改変を受けていることから、本来の掘り込み面は高いレベルにあったものと考えられる。

SV5162 本区画の東限を示す石垣であり、延長19.5mを確認することができたが、途中一部の石材が抜き取られているため連続していない。幅は北端において確認することができ、0.9mを測る。

SX5199 直径0.65mを測る円形の石組遺構であるが、北側のみ配石が見られない。石組は1石もしくは2石であり、検出面で高さが揃っている。炉の可能性も想定されるが、埋土中には焼土等が認められず、石組にも火を受けた痕跡は認められない。

SX5160 長方形プランを有する石敷遺構であり、南端にSE5161を付属する。南北4.4m、東西0.7～1.0mを測る。  
(水村伸行)

## 遺物 (第8～9図、PL11)

今回の発掘調査により得られた遺物は総数13,897点であり、その内訳は表2に示すとおりである。以下に、各層位と遺構ごとに主要遺物を紹介する。

### I 遺構確認面

本層は表土除去後に最初に確認された遺構面である、I 遺構を覆う埋土出土の遺物である。

**中国製陶磁器** 第8図1は、口径14.0cm、器高3.5cmを測る染付皿であり、B1群<sup>1)</sup>に分類されるものである。体部外面には渦巻文に退化した唐草文、体部内面にはアラベスク文、底部内面は草花文をそれぞれ描いている。

### II 遺構確認面

II 遺構面を覆う埋土であり、本層の上面に I 遺構を形成している。

**越前焼** 第8図2は口径16.2cm、器高4.6cmを測る鉢である。

### 区画 I

#### SK5167

**土師質皿** 第8図3は、口径14.0cm、器高2.1cmを測る。円盤状の底部に体部を巻き上げるタイプであり、体部下半には指頭圧痕が認められ、口縁外部から体部内面にかけては、横方向のナデ調整をおこなっている。4は、口径6.8cm、器高1.5cmを測る。体部外面には成形に伴う指頭圧痕を有し、体部内面から底部内面にかけては、回転ナデ調整している。

**瀬戸美濃焼** 第8図5は、口径10.9cmを測る鉄釉鉢である。

#### SK5173

**越前焼** 第9図1は、甕片である。口縁部は、丸味を持った肩部より直立気味に立ち上がる。肩部内面には成形時の押さえ痕が明瞭に残っている。

**中国製陶磁器** 第8図6は、青磁碗の底部片であり、高台径は5.0cmを測る。

### 区画 II

#### SK5231

---

1) 染付の分類については、小野正敏「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会 1982年 参照

大別	細別	器種	点数	%
日本製	越前焼	甕	2,559	
		壺	715	
		鉢	257	
		播鉢	564	
		桶	35	
		卸皿	6	
		その他	5	
	小計	4,141	29.80%	
	土師質	皿	6,963	
		土釜	21	
		耳皿	1	
		壺	5	
		芯押	1	
		その他	6	
	小計	6,997	50.35%	
	鉄釉	碗	50	
		皿	9	
		鉢	7	
		壺	10	
		天目台	1	
		花生	1	
		香炉	1	
		坏	1	
	小計	80		
	灰釉	碗	12	
		皿	56	
		鉢	41	
卸皿		1		
壺		7		
袋物		2		
香炉		1		
その他		3		
小計		123	0.89%	
瓦質		風炉	3	
	香炉	1		
	瓦燈	1		
	壺	1		
	その他	8		
小計	14	0.10%		
信楽	壺	268		
	その他	2		
小計	270	1.94%		
備前		19		
その他		8	0.06%	
土師器		94	0.68%	
須恵器		58	0.42%	
日本製合計		11,804	84.94%	

大別	細別	器種	点数	%
中国製	青磁	碗	233	
		皿	170	
		鉢	13	
		盤	13	
		香炉	12	
		壺	19	
		瓶	1	
		その他	2	
		小計	463	3.33%
		白磁	碗	27
	皿		479	
	坏		57	
	壺		4	
	袋物		1	
	その他		3	
	小計		571	4.11%
	染付	碗	113	
		皿	277	
		坏	12	
		鉢	3	
		盤	3	
		その他	6	
	小計	414	2.98%	
	緑釉		3	0.02%
	褐釉		16	0.12%
	瑠璃釉		7	0.05%
	華南彩釉陶器	壺	2	0.01%
赤絵	壺	1	0.01%	
中国製合計		1,477	10.63%	
朝鮮製	碗	31		
	壺	13		
朝鮮製合計		44	0.32%	
輸入陶磁合計		1,521	10.94%	

細別	器種	点数	%
金属製品	銅銭	5	
	釘	12	
	火鉢	1	
	つり針	1	
	銅皿	1	
	その他	16	
	合計	36	0.26%
石製品	バンドコ	120	
	硯	9	
	砥石	36	
	盤	21	
	鉢	37	
	白	10	
	風炉	11	
	炉壇石	5	
	基石	24	
	火鉢	10	
	石器	1	
その他	91		
合計	375	2.70%	
木製品	木簡	3	
	碗	2	
	面	2	
	加工木	86	
	曲物	10	
	杭	1	
柱	2		
その他	55		
合計	161	1.16%	
総合計	13,897		

表2 第114次発掘調査出土遺物一覧

**越前焼** 第9図2は、甕片である。口縁部は、直線的な肩部より上方へ器厚を増しながら伸びる。6は、口径36.0cm、器高15.4cmを測る播鉢であり、体部内面には6条を1単位とする播目を有する。

**土師質皿** 第8図7は、口径9.5cm、器高2.2cmを測る。体部外面には成形に伴う指頭圧痕を有し、体部内面から底部内面にかけては、回転ナデ調整する。

#### SK5232

**越前焼** 第9図3は、本遺跡で普遍的に見られるIV群cタイプ<sup>1)</sup>の甕片である。土壌内よりの出土であるため、使用時には土壌に埋設されていたものと考えられる。

#### SK5236

**越前焼** 第9図12は壺であり、SK5236内に正位置の状態に埋設されていた。胴部最大径を体部中程よりやや下方に持つ下膨れもタイプであり、器形的に特殊なタイプである。口径13.2cm、器高30.6cm、胴部最大径29.6cmを測る。体部外面下半には斜方向のヘラ削りをおこない、体部内面には当具痕が認められる。

#### SK5291

**笏谷石製盤** 第9図4は、SK5291内に正位置の状態に設置されていた。口径32.0cm、器高12.1cmを測り、底部には3ヶ所の脚を設けている。体部外面には縦方向、体部内面には斜方向の鑿による削り痕を明瞭に留めている。また、体部内面および底部内面中央には煤が付着している。

**越前焼** 第9図5は播鉢であり、第9図4の笏谷石製盤の中に正位置で設置されていた。口径35.8cm、器高13.3cmを測り、体部内面には10条を1単位とする播目を有する。

#### SE5225

**越前焼** 第9図7～8は甕であり、7はIV群c、8は古い様相を呈するII群の範疇に含まれるものと考えられる。第9図9は壺、10は播鉢である。10の播鉢は本遺跡で通有に認められるIV群に属するタイプである。第9図11は鉢であり、口径31.5cmを測る。

**土師質皿** 第8図9は口径8.8cm、器高3.6cmを測り、底部には脚部を有する。

**瀬戸美濃焼** 第8図10は鉄釉碗であり、口径11.4cmを測る。

**中国製陶磁器** 第8図11は、口径11.2cmを測る青磁碗であり、体部外面には鑿状工具による蓮弁文を有する。12は、高台径5.0cmを測る青磁碗の底部片である。13は、口径16.0cmを測る青磁碗であり、口縁部外面には雷文帯を有する。本遺跡ではやや古手に属するタイプである。14は口径11.5cmを測る青磁碗であり、体部外面には線描き蓮弁文を有する。

**朝鮮製陶磁器** 第8図15は、口径14.9cm、器高6.0cmを測る蕎麦茶碗である。

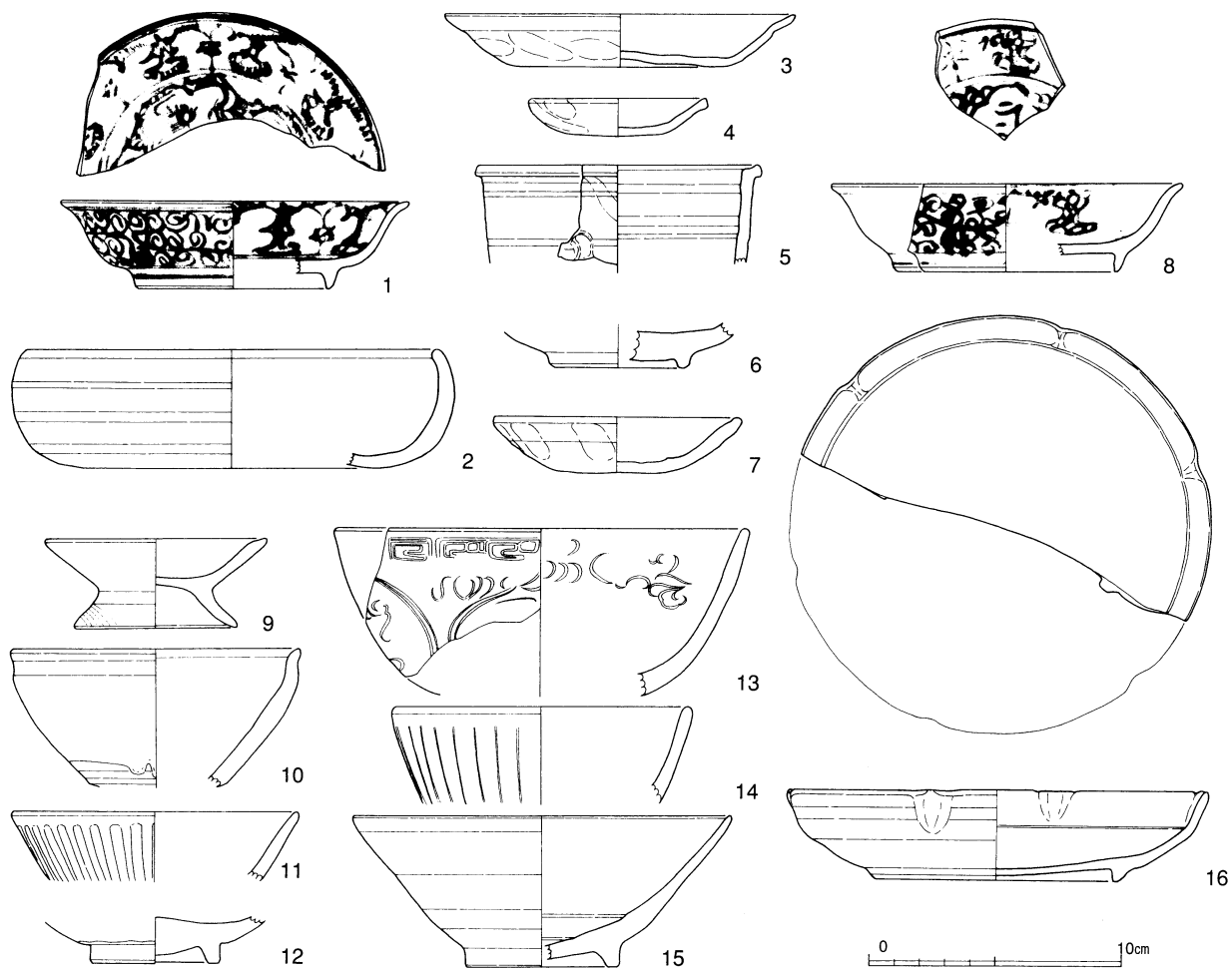
**木製品** PL11右下は、面であり2片から構成される。各々の大きさは、左側が残存長8.9cm、残存幅8.0cm、右側が残存長9.6cm、残存幅7.0cmを測る。材質は良質のヒノキであり、形状は、全体的に角ばったスタイルである。彫りこみによる下歯の表現のうち、一番外側のものについては、欠損した痕跡から牙であると考えられる。また、口内部より伸びる舌が表現されている。全体を黒漆で調整したのち、舌部分に朱漆を塗布している。

### 区画Ⅲ

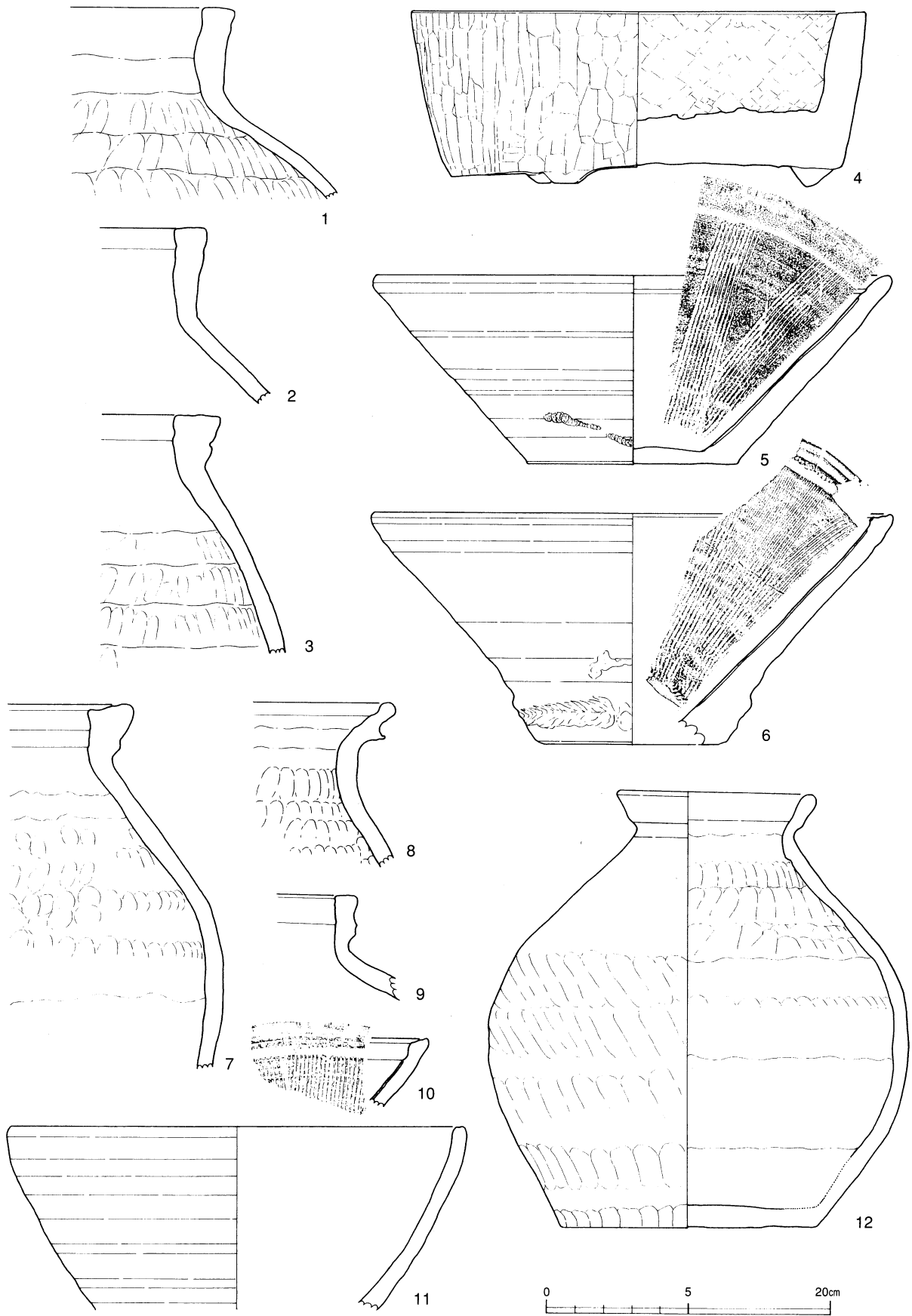
1) 越前焼甕の分類については、『県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』福井県立朝倉氏遺跡資料館 1983年 参照

SE5161

中国製陶磁器 第8図8は、口径14.0cm、器高3.5cmを測る染付B1群であり、体部外面には渦巻文に退化した唐草文、体部内面にはアラベスク文、底部内面には梵字を描いている。16は、口径15.5cm、器高3.6cmを測り、花卉数6枚を数える青磁輪花皿である。（水村伸行）



第8図 第114次発掘調査出土遺物実測図(1) (S=1/3)



第9図 第114次発掘調査出土遺物実測図(2) (S=1/4)

### 3. 第117次発掘調査

第117次発掘調査は、農作業小屋新築に伴う調査である。調査地点は、一乗谷川左岸に所在し、御茸山山麓に刻まれた小谷である道福谷の谷口部に位置する。地籍は城戸ノ内町6字中惣に含まれる、現況は畑地である。

近縁の中惣地係りには、濠と土塁を有する朝倉式部大輔景鏡館跡（第68次発掘調査）がある。また、昭和57年に実施した県道美山鯖江線道路改良工事に伴う調査では、同じ中惣地係りで前述の景鏡館跡に係る礎石建物および平庭を検出し、遺物として地鎮具の出土をみた（第43次発掘調査）。このほか、北方の5字瓢町では町屋を検出している（第18次発掘調査）。

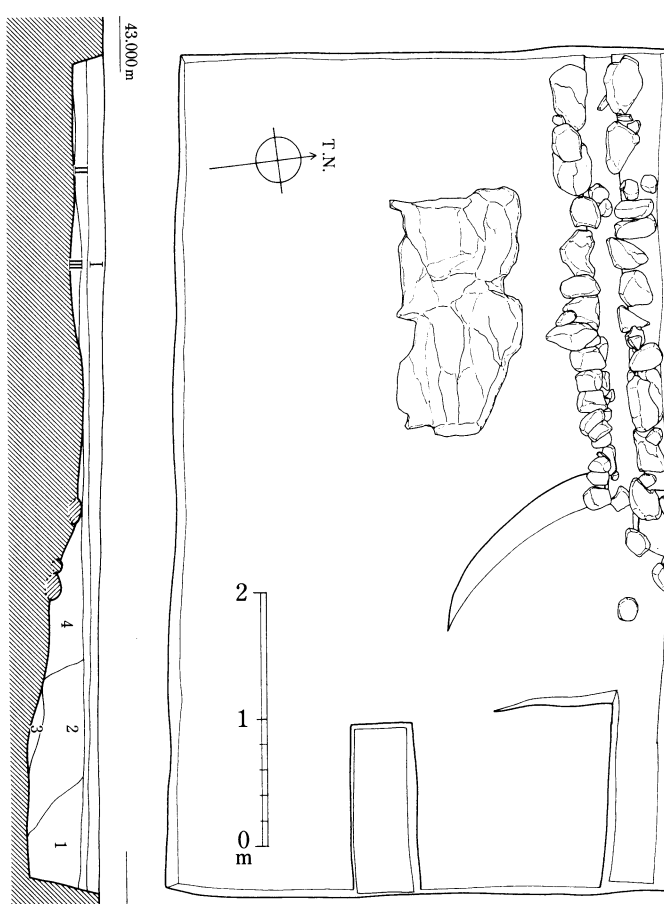
発掘調査は平成15年7月1日から11日まで実施し、調査対象面積は約26m<sup>2</sup>と狭小である。

#### 遺構（第10図、PL. 12）

遺構は現地表下約20～30cmの耕作土直下で検出した。検出遺構には、石組溝およびこれを切る土坑がある。

石組溝は、調査区北辺にはほぼ平行し、東西方向に配置されており、溝幅は20cmを計る。20～40cmの河原石を2石程度積上げ、溝底の石敷きはない。溝内の覆土は、暗灰色粘質土であった。また、石組溝の東端は、炭化物と焼土粒をやや多く混入する暗茶褐色粘質土を覆土とする土坑により切られている。

これら遺構以外の調査区内では全面で小礫を検出したが、現況の



I層 暗灰褐色粘質土 II層 暗燈褐色粘質土 III層 暗茶褐色粘質土  
1層 暗黄褐色粘質土（攪乱） 3層 暗茶褐色粘質土

第10図 第117次発掘調査遺構平面・断面図（縮尺1/60）

畑地では以前には水田耕作を行っていたため、水田基盤中に含まれた小礫の可能性が高い。なお、石組溝に南接して巨石が見られるが、耕作に支障があったため埋められたものであり、原位置を保っていない。

### 遺物 (第11図、PL. 12)

第117次発掘調査で出土した遺物の内訳は、第3表に示すとおりであり、調査区が狭小なことや、浅い地点での遺構確認であったことから、量的にも少ない。

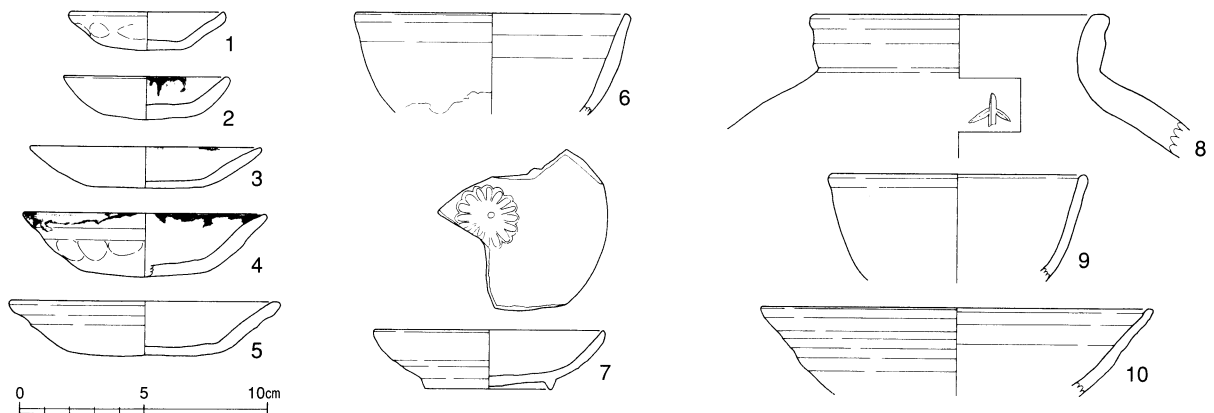
8は越前焼の壺であり、肩部に「小」字様のヘラ記号を持つ。口径12.2cmを計り、石組溝の覆土上層から出土した。1~5は、土師質の小皿であり、口径6.4~11.0cmを計る。口唇部にタールが付着するもの(2、3、4)もある。2が包含層からの出土である以外は、石組溝の覆土上層から出土した。6、7は瀬戸・美濃焼の灰釉の碗と小皿であり、小皿内底には菊花紋が印刻される。6は包含層、7は石組溝の覆土下層から出土した。9は包含層から出土した青磁の碗であり、口径10.6cmを計る。10は朝鮮製のいわゆるソバ茶碗である。口径16.0cmを計り、包含層から出土した。(工藤俊樹)

大別	細別	器種	点数	%
日本製	越前焼	甕	134	
		壺	128	
		鉢	9	
		播鉢	35	
		小計	306	39.43%
	土師質	皿	266	
		土釜	2	
		土鈴	2	
		小計	270	34.79%
	鉄釉	碗	7	
		壺	13	
		小計	20	
	灰釉	碗	2	
		皿	20	
	小計	22	2.84%	
その他		2	0.26%	
日本製合計			620	79.90%

大別	細別	器種	点数	%
中国製	青磁	碗	2	
		皿	7	
		小計	9	1.16%
	白磁	碗	1	
		皿	43	
		坏	1	
		小計	45	5.80%
	染付	碗	6	
		皿	39	
		坏	1	
	小計	46	5.93%	
その他	壺	2	0.26%	
中国製合計			102	13.14%
朝鮮製	碗	3		
	皿	1		
	朝鮮製合計	4	0.52%	
輸入陶磁合計			106	13.66%

細別	器種	点数	%
金属製品	銅銭	1	
	釘	5	
	合計	6	0.77%
石製品	バンドコ	13	
	硯	1	
	砥石	3	
	盤	3	
	鉢	4	
	白	1	
	風炉	1	
	石造物	1	
	火炉	1	
	板石	8	
その他	7		
	合計	43	5.54%
木製品	炭	1	0.001
総合計		776	

表3 第117次発掘調査出土遺物一覧



第11図 第117次発掘調査出土遺物実測図 (S=1/3)



## 4. 環境整備

平成15年度は一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査・環境整備事業の「中期10か年計画」に基づき、平成11年度の第104次発掘調査地（斉藤地係）2, 350㎡について、平成15年8月21日～10月24日にかけて、平成9年度の第100次発掘調査地（川合殿地係）1, 300㎡については、平成15年9月10日～10月27日にかけて整備工事を実施した。なお整備状況の写真撮影は、11月12日に両整備地について行った。平成15年10月27日には、湯殿跡庭園と義景館跡庭園の庭石を補修した。

### (1) 第104次調査地斉藤整備工事

遺構検出面にはすでに遺構保護のために、朝倉氏遺跡資料館によって山砂が5cm前後で敷かれていたが、除草剤（バスター）を撒いてから除草し、山土で埋め戻しを行った。

礎石建物跡は、碎石基礎に5cm厚でレミファルトを舗装した。境界には、アスファルトブロックを用いた。規模が不明な建物跡は、凡その範囲に8cm厚のソイルセメント舗装を行った。なおこれらの建物跡には、花崗岩製の遺構表示石を設置した。石敷遺構にはソイルセメントを平均5cm厚で充填舗装した。

建物跡の周辺は8cm厚の砂利混じり山土舗装とし、通路跡には小砂利を化粧敷した。

溝や石積施設は側石を補修するとともに、底には5cm厚でソイルセメントを充填舗装した。

屋敷内側の土塁境界石は、倒石を修復、欠けているところには発掘で出土した自然石を補充整備した。なお土塁上方は、山土を20～50cm厚で盛土し、高麗芝を張った。

屋敷内の要所に、高木のアカマツ、ウメ、ヤマザクラ、イロハモミジの各1本を植栽した。

### (2) 第100次調査地川合殿整備工事

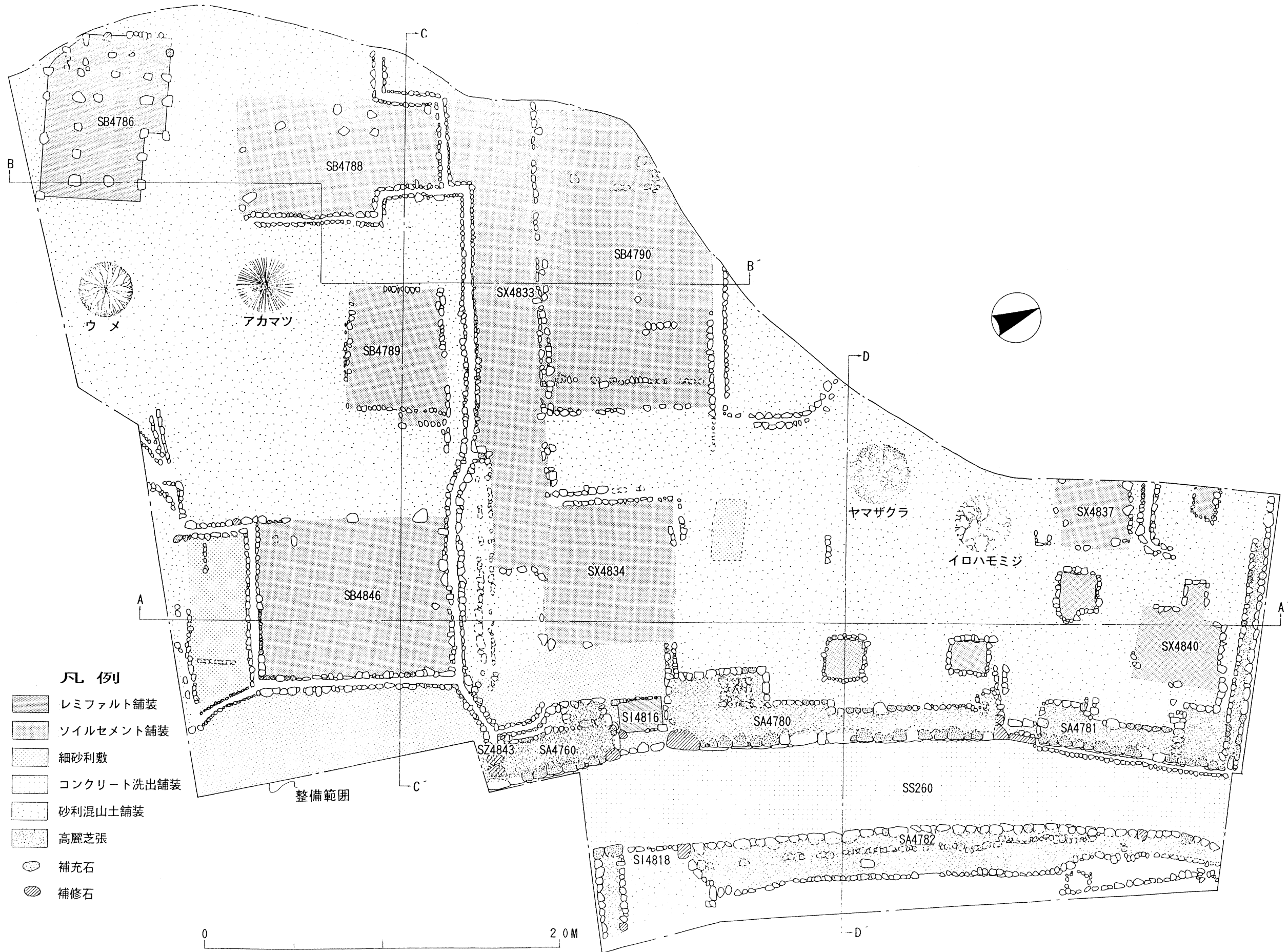
はじめに除草剤（バスター）を散布し雑草を枯死させ除草搬出、その後武家屋敷跡は6～60cmの厚さで、山土で埋めもどし整地した。屋敷跡の東と北の外側は既に埋めもどされていたので、その上に4cm内外の砂利を5cm厚で敷き均した。

土塁跡は、屋敷の規模を明確にするため、盛土し一部にドウダンツツジ計85本を1列に列植した。屋敷の西北隅に、高木のイロハモミジ、シダレザクラ各1本を植栽した。

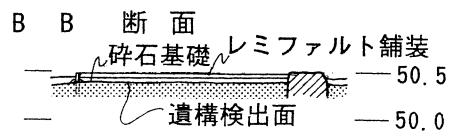
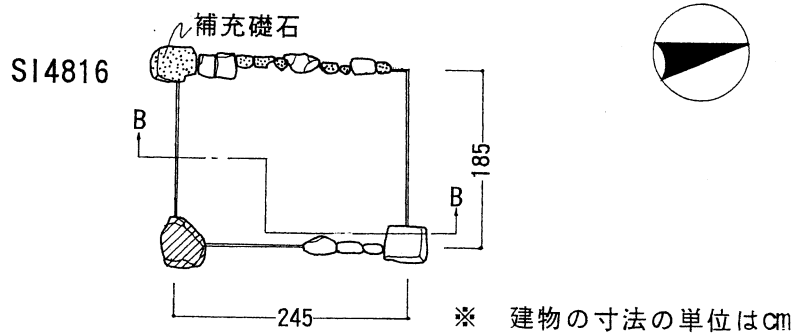
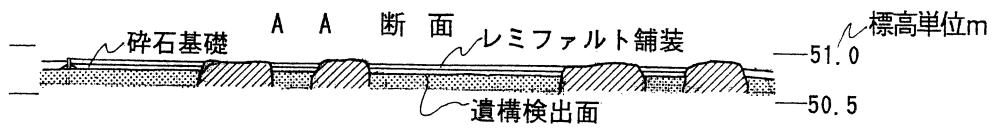
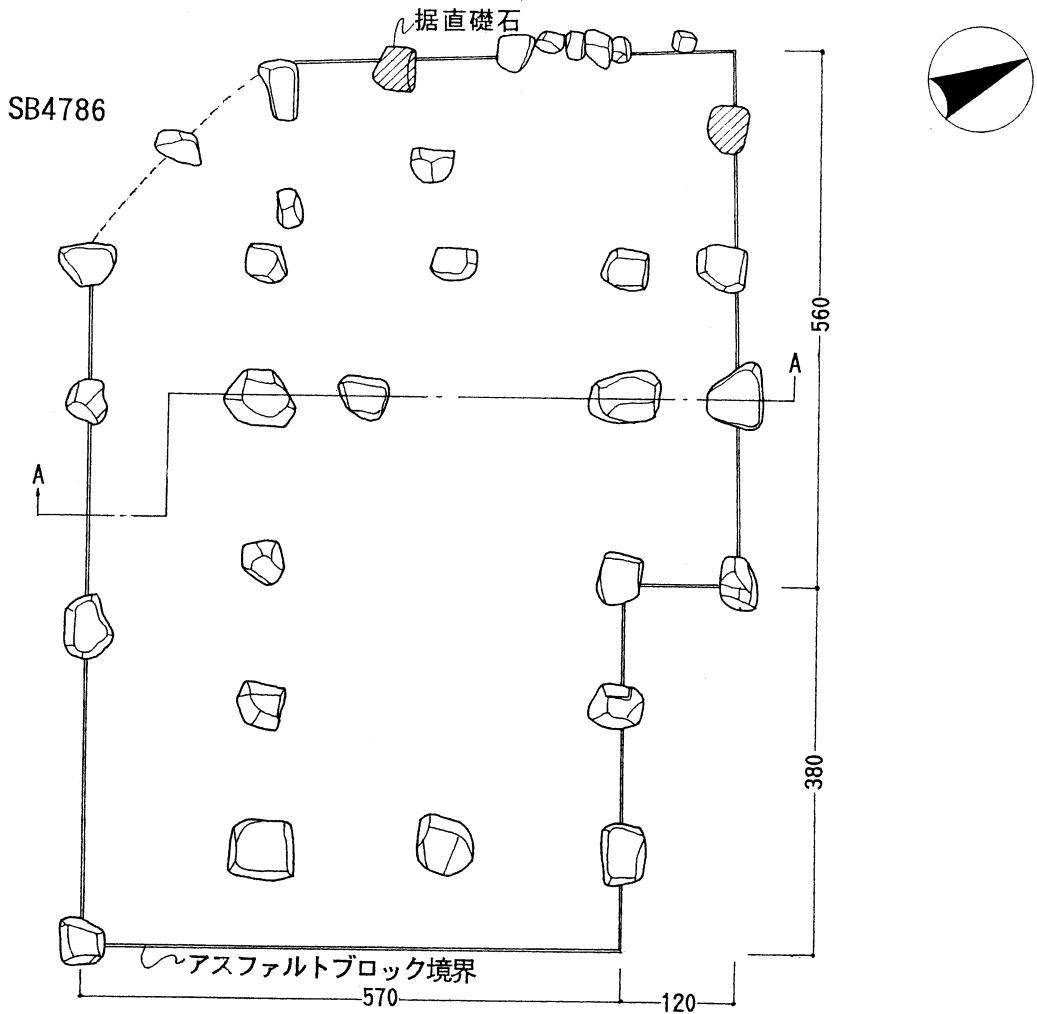
### (3) 庭石補修工

湯殿跡庭園の鶴石組の中心石と義景館の枯山水平庭の亀石を補修した。前者は頂部と側面に雑木が生えていたので除去し、割れた石は高性能エポキシ系接着剤アラルダイトスタンダードで接着し、隙間には同剤を充填した。後者は石の裏側が大きく剥離しそうであったので、同剤を流し込んで接着した。

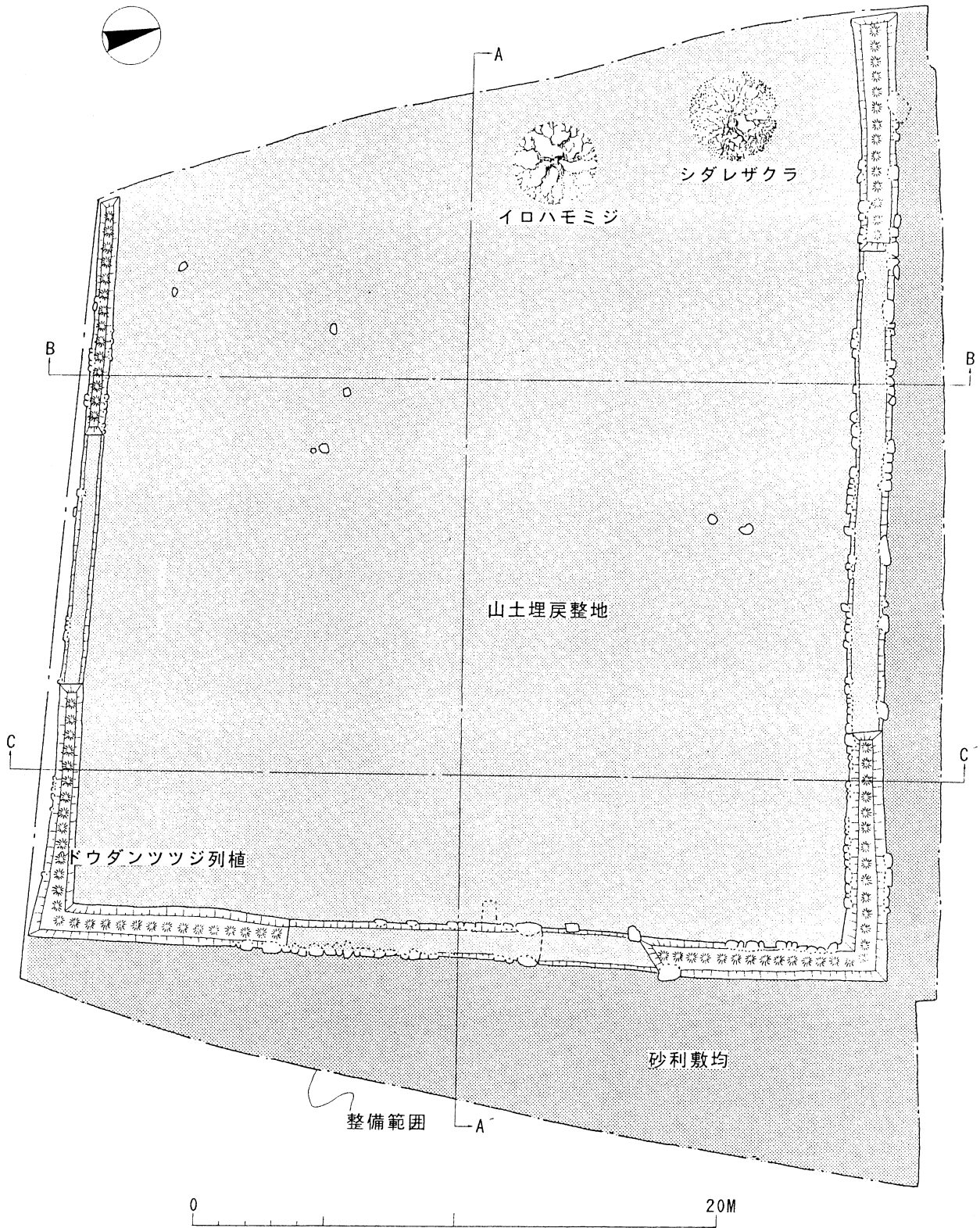
(藤原武二)



第12図 第104次調査地斉藤整備図



第13図 遺構・レミファルト舗装関係図



第14図 第100次調査地川合殿整備図



区画 I 全景 (北西から)



SB5164・5165・5191 (北から)



SB5166・SD5175 (東から)



SD5177 (北から)



SB5166 (南から)



SK5167~5173 (南から)



SB5164・5165 (東から)



SS5185 (西から)



SD5176 (東から)





SB5164 (南から)



SI5197 (北から)



SB5035 (西から)



SB5255 (北から)



SD5271・5273・SS5272 (南から)



SB5337・SK5344~5352・SE5355 (西から)



SE5225 (北から)



SE5354 (東から)



SE5355 (東から)



SF5218 (北から)



SD5042 (東から)



SD5073 (西から)



区画Ⅲ南側全景(北から)



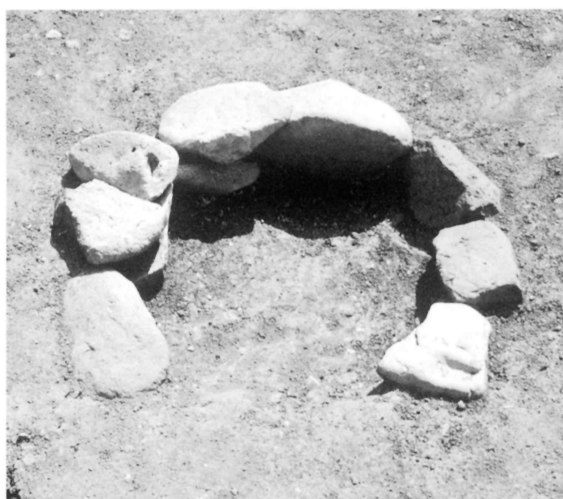
区画Ⅲ北側全景(南から)



SX5160・SE5161(東から)



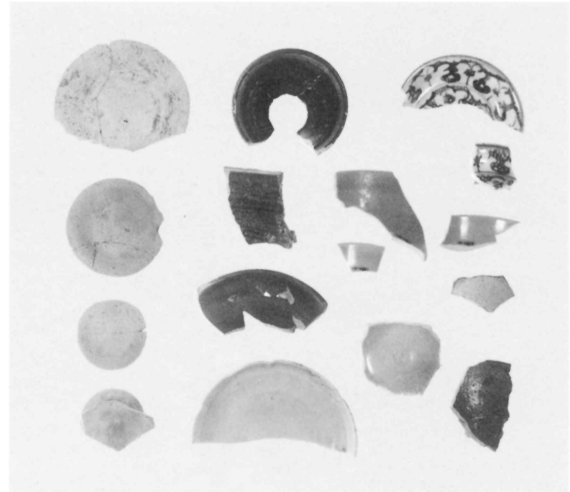
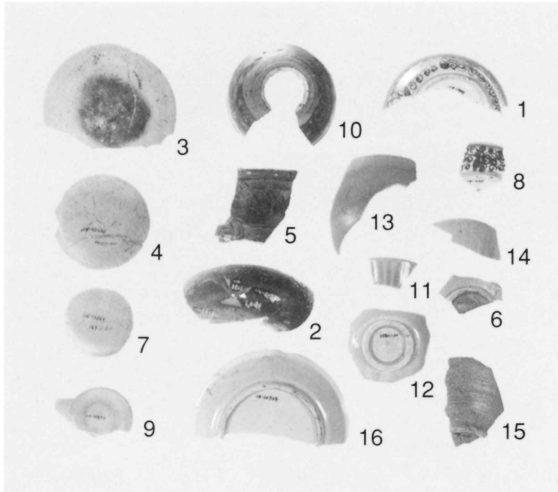
SV5162・SD5163 (東から)



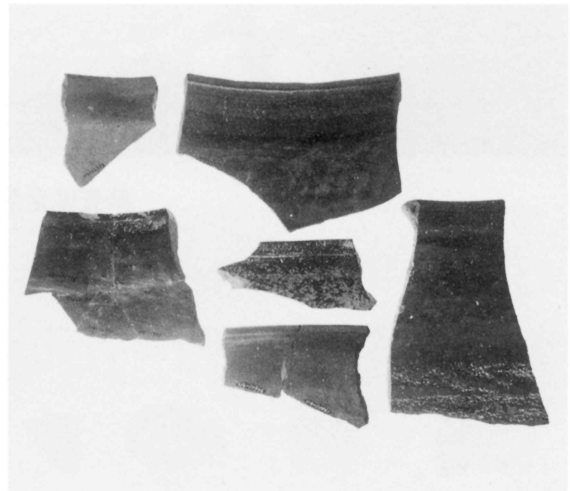
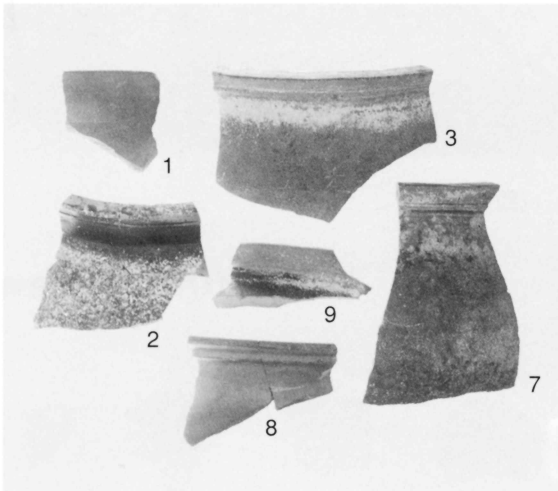
SX5199 (北から)



SE5198 (西から)



土師質皿3・4・7・9、越前焼鉢2、瀬戸美濃焼鉢5、同碗10、染付皿1・8、青磁碗6・11~14  
朝鮮製碗15



越前焼甕1~8



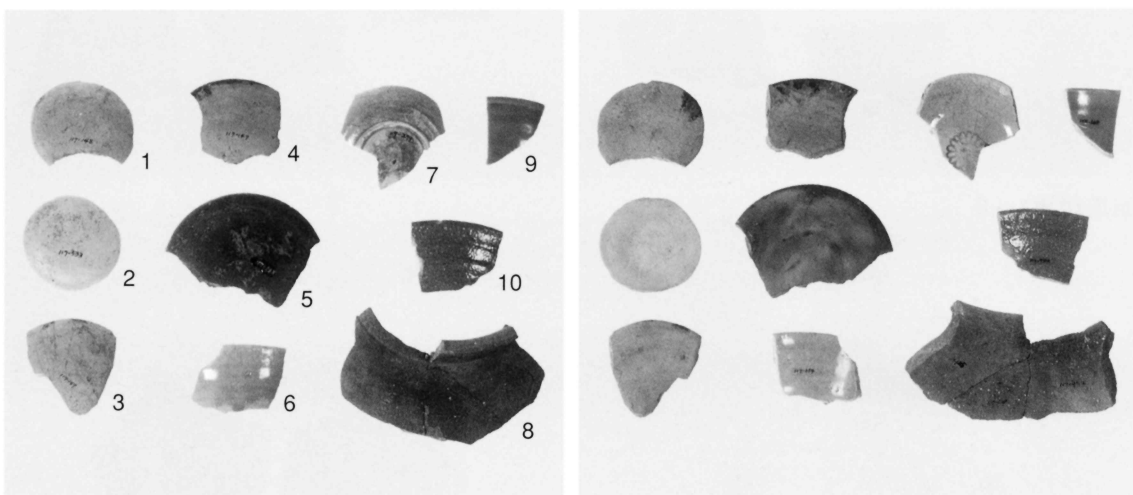
越前焼壺

木製面



調査区全景 (西から)

第117次調査出土遺物



土師質皿1～5、越前焼壺8、瀬戸美濃焼碗6、  
同皿7、青磁碗9、朝鮮製碗10





第104次調査地斉藤整備状況 全景 (南から)



第104次調査地斉藤西側整備状況 (北から)



第104次調査地斉藤SB4786整備状況 (東北から)



第104次調査地斉藤SI4816・4818,SA4760・4780整備状況 (東から)



第100次調査地川合殿整備状況 全景 (南から)



第100次調査地川合殿東北部整備状況 (東北から)

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	とくべつしせきいちじょうだにあさくらしいせき
書名	特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡35
副書名	平成15年度発掘調査・環境整備事業概報
シリーズ番	35
編集者名	水村 伸行
編集機関	福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
所在地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 TEL.0776-41-2301
発行年月日	平成16年3月31日

調査地区	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
第114次調査	福井市城戸ノ内町 字雲正寺	18210	史-31	35° 59' 52	136° 17' 48	030701 ～ 031225	1,700m <sup>2</sup>	環境整備に伴う発掘調査
第117次調査	福井市城戸ノ内町 6字中惣	18210	史-31			030701 ～ 030711	26m <sup>2</sup>	作業小屋新築に伴う現状変更調査

調査地区	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
第114次調査	武家屋敷町屋	室町・戦国時代 (15・16世紀)	道路2、土塁石垣3、 門1、井戸8、建物12 以上	越前焼、土師質皿、 瀬戸・美濃焼、白磁、 青磁、染付	大規模屋敷跡および 掘建柱建物群
第117次調査		室町・戦国時代 (15・16世紀)	溝1、土坑1	越前焼、土師質皿、 瀬戸・美濃焼、白磁、 青磁、染付	

特別史跡

# 一乘谷朝倉氏遺跡 35

平成15年度発掘調査・環境整備事業概報

発行年月日 平成16年3月31日

編集・発行 福井県立一乘谷朝倉氏遺跡資料館©

印刷 白崎印刷株式会社